
白ウサギをつかまえて

純°

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白ウサギをつかまえて

【NZコード】

N8814D

【作者名】

純。

【あらすじ】

不思議の国のアリスの世界からとびだしてきたぶつ飛び少女
アリス自称常識人間で順応性に優れた僕 純僕が現在進行形
でやらされているのは、不思議な国のアリス、の絵本から飛び出
た白ウサギを探すこと。平凡な生活に突如訪れた終焉。そしてよう
こそパラレルワールド。

序章・平穏の終焉

僕が彼女と出会ったのは桜の散る頃だった。

最近では満開の桜の花が歓迎してくれる入学式なんてあまり見なくなった。

僕の学校も今日が入学式なのだが、桜並木の桜は花びらを道にほとんど落としてしまっていた。

桜の絨毯だと言えば幾分かは救われるような気もするが、でも哀しいかな、人々に踏まれた桜の絨毯はあまり綺麗とは言い難いものだつた。

「やつぱり今年も散ったか…」

「なあにメルヘンチックな事言つてくれてるの、純ちゃん」

彼の名前は浩平。

幼稚園からの腐れ縁。

1番の親友（だと信じたい）。

「メルヘンチックか？」

「高校生になつてお花さんとお話でちゅうか？」

「か、会話なんかしてない。」

とまあ、こんな風に一方的にいじられているとも言えるが…

「そりいえば純。」

「何？」

いじられた事に反撃してそつけなくしてみたけど、浩平は無視して

続けた。

「メルヘンチックな噂知ってるか?」

「もうメルヘンチックはいって。」

「違う、違う。リアルにメルヘンな噂なんだよ。」

珍しく浩平が笑うことなく真面目に話している。

だから、この僕をからかうことを生き甲斐にしているようなこんな男の噂話を少しだけ真面目に聞いてしまったわけだ。

「不思議の国のアリスって知ってるよな?」

一応文芸部で図書委員会を務めあげる僕である。その手の話しさ得意だ。

「知ってるけど?」

「じゃあ……白ウサギが逃げたって知ってるか?」

それはあまりにも唐突すぎて、あまりにも現実味を帯びていなくて、そして何よりこの男が真顔で語っているので仕方なかつた。言わば生理現象だ。

「ふつ。」

「お前つ、笑いやがつたな。」

「浩、その話を聞いて笑わない方が奇跡だよ。」

僕はダムが決壊したかのようにお腹を押さえて笑つた。

「痛つた。」

僕は頭のたんこぶを摩りながら、この痛々しいものをつくった張本人を睨んだが、彼はさも当たり前かのような顔をしている。

「で、続きは？」

「次笑つたら戦闘不能にするからな。」

目が笑つてない。

「僕だつて学習能力がないわけじゃないよ。で、白ウサギが何だつて？」

「逃げ出した。」

「一生懸命理解しようとしてるよ？でも、いきなり『白ウサギが逃げ出した』って言われてどう反応しようと。」

浩平はしばらく考えて、なにかを確認するように話しだした。

「お前の知つての通り、白ウサギを追いかけるのがアリスだ。アリスの話は白ウサギがいないと成り立たない。」

「まあ…… そうだよね。」

僕は取りあえず相槌をうつておく。

「俺を含めて確か… 15人のやつらの夢の中にこれくらいの金髪のあれだよ、外人の… これくらいの」

「大丈夫、わかるわかる。」

浩平は気持ちが高ぶりすぎたのかまともりのない言葉を繰り返している。

「あ、その子の絵がある。」

ポケットからルーズリーフの切れ端をとりだした。

そこに描かれている少女は確かにアリスと言われたら納得できる少女であった。

「これどうしたの？」

「5組の前橋に描いてもらつた。前橋も同じ夢見たらしいから。」

「鈴音ちゃん？」

「何で知つてんの？」

「漫研部長だし…」

「ああ…」

前橋鈴音は文芸部と部室を共有している漫画研究部の部長さんだ。絵がすごく上手だけど、少し暗くて、他人と話すのが苦手な…人である。

「で…この子が？」

「夢の中にでてきて『白ウサギがいなくなつたの…探してくれない？』っていうんだ」

「よく夢のこと覚えてな。」

「俺もわかんないんだよな…」

「それで？」

「それだけだ。ただ…誰一人として声が出なかつたって。」

「金縛りの域だな…。」

僕は信じるか信じないか考えあぐねていた。

前橋さんがこいつの嘘に付き合つような子ではないことを自分が何よりも知つていたし、浩平自身前橋さんのようなノリが良くない子に話しかけたがらない。

だけど…信じるにはあまりにも飛躍しすぎた話だ。

家に帰つてから一人、ぼんやり考えてみた。

やはり信じがたい……。

しかし、嘘であるとも信じがたい……。

「やめたやめたやめた。」

信じても信じなくても、最終的には同じことで、自分には何も実害はない。

「飯でも作るか……。」

僕は高校生になつてから一人暮らしをすることにした。というよりは、そうならなければならない状態になつてしまつたともいう。一人暮らし2年目に突入すると、やはり料理の腕もかなり磨かれる。

僕は自画自賛じゃないけど、わりと上手く出来たスペゲティーミートソースをお腹いっぱい食べて、珍しく宿題を出さなかつた数学の先生に有り難みを感じながら、早めに寝ることにした。

僕はこの時すでにあの、噂、のことを忘れていた。

この日を最後に僕の好きな何の変哲もない日常は消えてなくなる。分かつっていたならもつと別れを惜しんだのに……[冗談だけど]

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8814d/>

白ウサギをつかまえて

2010年10月28日08時13分発行